

知っておきたい『骨・軟部腫瘍』の正しい知識

～多様な病態に対応する診断と治療法～

全身のあらゆる場所に発生する可能性があり、発症年齢も子どもから中高年まで幅広い「骨・軟部腫瘍」。症状が進行するまで気づきにくく、専門的な診断が行える医療機関も少ないために、早期治療は非常に難しいのが現状だという。大分大学医学部整形外科（先進医療科学科）の田仲和宏教授に、疾患の概要と治療法などについて尋ねた。



大分大学医学部整形外科
大分大学医学部先進医療科学科 教授

田仲 和宏 氏

稀な疾患で病型も多様なため
診断がつかないケースも

「骨・軟部腫瘍」とはどのような疾患ですか。

「全身の骨や、筋肉・関節など軟部組織に発生する腫瘍の総称です。胃や腸の粘膜などに生じた悪性腫瘍は『癌』ですが、骨・軟部腫瘍はそれらと区別するため、悪性の場合には『肉腫』と呼びます。

全ての悪性腫瘍のうち、骨発生の肉腫は約0・2%、軟部の肉腫は約1%と稀ではあるものの、良性（中間型）悪性を合計すると200種類以上の病型が存在し、全身どこにでも発生しうる点が、診断を難しくしています」

「発症初期は自覚症状も無いそうですね。

「はい、それが早期発見しにくい理由であり、『小さなしこりが大きくなってきた』『腕や足の一部の痛みが治まらない』など、症状が進行してから医療機関を受診する患者さんがほとんどです」

「無計画切除」を防ぐため
警鐘が鳴らされている

「医療機関での診断の流れは。まず、問診・触診を行い、骨・軟部腫瘍が疑われる場合はレントゲンやMRIによる画像診断を行います。その後、組織生検による病理診断や遺伝子検査などを経て病型と治療方針を確定します。

悪性だった場合、治療は外科手術が基本ですが、化学療法や放射線療法を併用することもあります。再発を防ぐため、腫瘍だけではなく周辺の正常組織まで含めた『広範切除』が必要です。腫瘍を含む周囲5cmを切除する治癒的広範切除を行うのが理想的ですが、腫瘍の部位により難しい場合、専門知識を持つ整形外科医が筋膜や関節包など『バリア層』の厚さを考慮し、適切な切除範囲を決定します。

軟部の場合、切除した箇所に大きな組織欠損が生じると自身の皮膚や筋肉などを移植して再建しますが、骨の場合、骨欠損部を人工関節など人工物に置き換えるのが一般的です。近年は、切除した骨を熱や液体窒素素

で処理し、元の場所に戻す『処理骨』等による再建治療も行われています。

小さなしこり程度だと、簡単な手術で切除しようにとする医師もいるのですが、もしも切除した後に悪性腫瘍だったと判明した場合、その後の治療が何倍も大変なことになります。そのため、うっかり手術」といわれる無計画切除をしないよう、日本整形外科学会が全国の医師に対して警鐘を鳴らしているところです」

より良い治療法を確立する
全国規模の研究活動

「骨肉腫には『死の病』といったイメージもありますが。医療の進歩により、多くの患者さんを救えるようになりましたが、組織再建の技術が進歩していなかった頃は、悪性腫瘍が発生した手や足を切断するしか対処法がなく、抗がん剤が併用される前まで、肉腫が肺に転移して亡くなる患者さんが多数いました。

患者数が少ない希少がんだからこそ、複数施設による共同研究が必要です。そこで国内では、20年以上前から『JCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）』に骨軟部腫瘍グループを立ち上げ、より良い治療法の研究に取り組んでいます。また、10年ほど前からは『JCCG（日本小児がん研究グループ）』が、小児がんとしての肉腫の治療法を研究しています。今後も全国の参加施設と力を合わせながら、より良い治療法の確立を目指す計画です。

手足の痛み・疼きが長引く、小さなしこりが徐々に大きくなっているなど、何らかの異常を感じた場合は、まず、最寄りの整形外科クリニックなどで相談しましょう。そして必要な場合は、専門医がいる施設を紹介してもらおうようにしてください」